



# 映画サロン

- アジアセンターODAWARA第2回映画サロン
- 映画 小津安二郎監督「東京物語」
- 1996年9月28日(土) 10:30AM~2:30PM
- 会場 アジアセンターODAWARA「箱根ROOM」



**アジアセンターODAWARA  
第2回映画サロン**

第1回映画サロン（6月29日）では104名の方が署名され、90名を超える皆さまからアンケートをいただきました。ご回答の内容は今後の運営に限りなく参考となる素晴らしい集計を得ました。アジアセンターODAWARA第2回映画サロンは“次に見たい小津映画”の最高点でした「東京物語」をご覧ください。今回も井上和男さんが講演されますが、東京物語で井上さんは助監督でしたので、お話の内容もまた楽しいものとなるでしょう。

映画、ランチ、シネマトークを緑濃いアジアセンターODAWARAでお寛ぎ下さい。

日 時：1996年9月28日（土） 10：30～14：30

会 場：アジアセンターODAWARA（小田原市城山4-14-1 Tel.0465-22-6131）

シネマトーク：「小津映画のころII」映画監督 井上 和男

上映作品：「東京物語」1953年松竹大船作品

監督	小津安二郎	キャスト役名	平山 周吉	笠 智衆
製作	山本 武		とみ	東山千栄子
脚本	野田 高梧		平山 幸一	山村 聡
	小津安二郎		文子	三宅 邦子
撮影	厚田 雄春		実	村瀬 禅
美術	濱田 辰雄		勇	毛利 充宏
音楽	斎藤 高順		金子 志げ	杉村 春子
照明	高下 逸男		床造	中村 伸郎
録音	妹尾芳三郎		平山 紀子	原 節子
編集	浜村 義康		平山 敬三	大坂 志郎
			平山 京子	香川 京子
			服部 修	十朱 久雄
			よね	長岡 輝子
			沼田 三平	東野英治郎
			アパートの女	三谷 幸子
			敬三の先輩	安部 徹

**プログラム**

映画「東京物語」	10：30～12：30
ランチ	12：40～13：20
シネマトーク	13：30～14：30

チケッ ト：3,500円（限定100名）

チケット販売：・アジアセンターODAWARA（Tel：0465-22-6131）  
 ・伊勢治書店 小田原銀座通り（Tel：0465-22-1366）  
 ・八小堂書店 小田原駅前（Tel：0465-22-7111）  
 ・平井書店 小田原郵便局前（Tel：0465-22-5370）  
 定員に達し次第締め切らせていただきます。

送 迎 バス：特別手配の箱根登山バス9：50（水ノ尾行）をご利用下さい。映画サロンご来会の方は無料整理券を差し上げます。小田原駅西口ロータリーから運行されます。お帰りの際はアジアセンター専用バスをご利用下さい。

## 映画「東京物語」

☆解説・親の期待を一身に担って、東京へ出て行った子、やがて老いた親はその出世ぶりをこの眼で確めようと上京してみれば、東京とは名のみ、広い東京の場末も場末で、細ぼそとしかし精一杯生きている——夢も希望もはぐらかされた失意の親は諦めて故郷へ帰ってゆく。骨組みは「一人息子」と同じである。ただ、息子は一人ではなく子供達が複数になって、長男・長女が一家を持って東京に、三男は大阪に、次女は両親と一緒に尾道に居り、次男は戦死したが、その未亡人がやはり東京にいるという、構成的に広がりを持たせた。別に邪慳にするわけではないが、連れ合いを持ち、子が出来一家を形成している子供達にとっては、老いた親は所詮お荷物になるという辺り、「明日は来らず」（昭和十二年、パラマウント、レオ・マッケリー監督）に触発された野田高梧自身が云うが、自分が育てた子供より、云わば他人の紀子（次男の嫁、原節子）の方が親身になってくれるという設定は独自のものである。



☆見どころ・特に、出だしの子供達、実（十四歳）勇（六歳）の扱いの上手さ、—「僕どこで勉強するんだい！」「どこだって出来るじゃないの」「ね、どこで勉強すんのさア！」「うるさいわねえ！いつも勉強なんかしないで！」「じゃ、しないでいいんだね、勉強しないでいいんだね。ああラクチンだ。アラのきさだね」とか、S 92—ウララ美容院の、熱海から帰って来た老父母を客から見咎められて、「どなた？」「ええ、ちょっと知り合いの者——田舎から出て来まして……」など、巧まざるユーモアを秘めた秀逸なセリフが多い。

### 「晩春」を観て 若林ふみ子

小津安二郎監督の戦後の作品を評して「ロー・アングルの妙味」と言われて久しい。カメラの位置を人の視線の高さで撮る、映り出される映像は人物の口調や仕草が濾過され、その姿はまるで能を見ているような品性があり、それでいて温かみを感じる。

今回観賞させていただいた「晩春」の中での曾宮文雄の会話、紀子と服部との会話は、言葉も表情も少ないのにわたしは場面からいつの間にか、豊かなイメージを醸し出させられ胸を打つものがあった。

このことは「晩春」に限らず、「東京物語」「おはよう」「秋日和」を観たときも同様であった。わたしは今井上先生が語られた、小津監督のシンガポールからの帰還のときのエピソードを伺って、長い間わたしの心の中の一つの謎が解けた思いがした。

小津監督は観客を信頼し、作品のイメージを観客に委ねたのではないだろうか。その陰にあるヒューマンイズムは、ロー・アングルを生み、演者の会話が対話形となったのではないであろうかとも。

台詞を例にあげても、一方的な話し方に見えながら（口調が単調であるために）きちんと対話している。対話は双方の信頼が土台にはならない。ヒューマンイズムの条件である。このことは日本的な背景美と同様に日本に限らず外国での評価も高めた、と思う。

井上先生の淡々とした解説で改めて映画を深く観賞する機会を得て嬉しい。〈文教大学〉

## 講演される井上和男さん

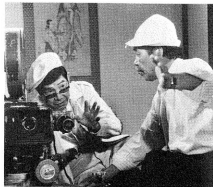
小津映画を語る第一人者です。「生きてはみたけれどー小津安二郎伝」は1987年のベルリン映画祭の招待作品となり、翌年はベルリンやケルンに招かれて講演されています。以後、武蔵野美大のゼミ、早稲田大学のオープン講座、NHK文化センターの映画講座などを担当し、一昨年小田原に居を定めて以来、川崎長太郎文学碑の建立や透谷祭を初めとする各種の文化イベントの先頭を走っています。そのプロフィールは、

〔生年月日〕1924年12月27日

〔出身地〕神奈川県小田原市栄町

〔略歴〕県立小田原中学を経て早稲田第一高等学院に入る。44年3月学徒応召し海軍飛行少尉に任官。45年8月復員後、早稲田大学商学部へ。在学中に小田原市で劇団こゆるぎ座を創立し劇作家を志すが、48年春、卒業と同時に、定職を持つため松竹大船撮影所脚本部に入る。同脚本養成所六期生として半年の研修中、師事した新藤兼人にすすめられて助監督試験を受け、同年12月助監督。松竹の戦後第一回の助監督人社で松山善三と同期。渋谷実「自由学校」ほか、川島雄三「スポーツ王」ほか、小津安二郎「東京物語」などにつく。55年京都映画「父と子と母と」での監督経験を経て、58年9月、松竹大船の監督に昇進、「野を駆ける少女」で正式デビュー。スター女優だった桑野通子の遺児、桑野ゆき子の初主演という話題性と相まって新鮮な青春像の描写が注目され、つづいて桑野主演で「明日をつくる少女」を撮る。監督六作目の「子科練物語・紺碧の空遠く」(60)は航空自衛隊の協力を得ながら反戦の色濃く、国会で取り上げられるなど物議をかもした。折しも松竹スーヴェル・ヴァーグが台頭した激動期に「水溜り」(61)、「無宿人別帳」(63)など独創的作品を生んだ。64年、松竹専属を解いてフリー、同年2月、東宝・ワーナー合作「勇者のみ」の日本側監督をつとめる。65年、東京映画と専属契約し東宝喜劇数本を撮った後、68年、再びフリー。同年、大阪万国博ガスパビリオン映像監督。71年6月、映像製作・出版を目的に独立プロ、童友社を設立。同社から編著「小津安二郎・人と仕事」を刊行、83年に松竹で記録構成映画「生きてはみたけれどー小津安二郎伝」を脚本・監督、小津門下として業績をしる。テレビはフジで69年「どっこいしょ」、89年「怪盗夢吉忍び控」、NTVで70年「はまぐり大将」、TBSで68年「花は咲平」、83年「松竹映画70年の女優たち」、同86年「歌おう！笑おう！寅さんだよ！」を担当した。編著書「小津安二郎作品全四巻」(立風書房)、「陽のあたる家ー小津安二郎とともに」(フィルム・アート社)、共著書「日本映画を読む」(ダゲレオ出版)。美大映画学校講師、映画プロデューサーとして「復讐するは我にあり」「春来る鬼」などを製作、また東京宝塚劇場・明治座・新橋演舞場などの舞台の脚本、演出も手がけている。

〔作品〕56：父と子と母 58：野を駆ける少女、明日をつくる少女 59：ハイ・ティーン、暁の地平線 60：子科練物語・紺碧の空遠く 61：悪の華、水溜り、熱愛者 63：無宿人別帳、「可否道」より・なんじゃもんじゃ 65：喜劇・各駅停車 66：新事件記者・大都会の良、新事件記者・殺意の丘 67：喜劇・駅前学園、喜劇・駅前探検 72：湯けむり110番・いるかの大将 73：喜劇・黄綬褒賞 86：生きてはみたけれどー小津安二郎伝



小津映画の厚田カメラマンと井上監督(右)